

ストップモーション&ライフヒストリーインタビューによる 授業研究

－中国人日本語教師の授業形成史研究－

森脇 健夫*・康鳳麗**・坂本勝信***・小西知代****・胡君平*****

Research for Lesson Study by Method of Stop Motion and Life-History Interview
－Research for Shaping of Chinese Teacher's Competence of Japanese Language－

MORIWAKI TAKEO *, KANG FENG LI**, SAKAMOTO MASANOBU***, KONISHI CHIYO****,
HU JUNPING *****

要 旨

本研究では、ビデオを使ったストップモーション方式による授業検討にライフヒストリー的な観点を加えてのインタビューを取り入れ、授業者の授業形成史を明らかにする方法を提案する。併せてコロナ禍の中で実際に授業に参観できない場合にどのように授業検討を進めるかという課題にも挑戦する。

中国、四川省成都において行われた日本語の授業ビデオを事前に送ってもらい、日本国内において散在する4人の研究者がZoomを使って事前検討を行った。またその検討をもとに、中国人日本語教師を含めたZoomによる検討会を行った。その経過と記録をもとに方法論的な意義と課題を明らかにした。ビデオによる授業形成史研究は、授業場面を切り取り、共有し、授業の特徴を明らかにできるストップモーション方式による検討、またその特徴の形成史を明らかにすることが可能なライフヒストリーインタビューによって一定可能なことが明らかになった。しかしながら、ビデオカメラの主観性や臨場感の欠如等、授業の重要な要因についての検討はやはり困難な部分もある。そこにどのような課題が存在するか、その課題をどのように解決すればよいか展望を明らかにした。

キーワード：ストップモーション方式による授業検討、ライフヒストリーインタビュー、授業形成史、日本語教育

1. はじめに

1.1 ストップモーション方式による授業検討

ストップモーション方式による授業検討(註1)は、藤岡信勝(1991)によって提案された授業検討の方式である。ストップモーションの本来の意味は映画・テレビの画面で、動いている被写体を急に静止させる技法のことであり、アニメ等の制作技術として用いられてきた。ビデオで撮影された動画を静止させ、その場面を共有しながら検討する授業検討の方式を提案したのが藤岡だった。

藤岡は、この方式のメリットを3点挙げている。

1つは、議論が授業の事実在即してなされる点(実証性のメリット)である。授業検討において事実を映像で共有できることである。校内研究会の授業後の検討の際、よくあるのがコメント箇所の事実そのものに誤認があったり、ぼやけていたり、全体が見えていなかったりするということである。校内研究会では、研究授業の逐語記録をとり、検討会に持ち込むのは、事実を共有するという意味がある。し

* 三重大大学大学院教育学研究科, ** 鈴鹿医療科学大学, *** 常葉大学, **** 国際教養大学, ***** 成都理工大学

かもビデオの場合、ビデオ撮影者の意図はある程度反映されるが、映像を共有しながら検討ができるという利点がある。

2 つ目は、問題を共有し定式化できるという点（生産性のメリット）である。藤岡(1991)は次のように述べる。「参加者が研究会終了後『どの発言も参考になった』と異口同音にのべるのは、参加者全員で問題を共有できたからである。他の参加者の意見に異論がある場合でも、その意見が何をとりあげどう問題にしているかは理解できる。このように『問題の共有』が可能なのは、ビデオで授業を（間接的ながら）経験するという『経験の共有』があるからである」。

3 つ目は、参加者が平等に発言できるという利点（平等参加のメリット）である。参加者は再生されたビデオを見ながら、気になる箇所を手を挙げ、司会者に許可を得て発言を行う。その権利はすべての参加者に平等に保障されている。したがって、権威のある発言力のある参加者しか発言できない、という従来型の授業検討にはない機会均等の原則が貫かれている。

しかし、このストップモーション方式による授業検討にはいくつかの課題の提示と批判がある。

困難な点として、次の三つの点が指摘されているとする二杉他（2002）。

①どこで一時停止するか議論するかつかめない。

②時間がかかりすぎる。

③授業者を集中攻撃するようになってしまう。

①については、司会者の役割がきわめて重要だと藤川（同上）は述べる。また②については、授業の活動が一定継続する場合に、「早送り」機能を使う、あるいは授業の一部に集中した検討を行う等の工夫が提起されている。③については、「授業のよしあしを評価するのではなく、教師や子どもの思考を明らかにするよう意識して授業検討を行う」（藤川）が提起されている。

①については、より根本的な批判が村山（2008）によってなされている。村山は次のように述べる。

「参加者の誰かが発言したいと思った部分が論点となるため、ストップモーション方式自体に論点出しの方法があるわけではなく、取り上げられた論点がどのような授業力量と関連しているかも不明である」そしてその根本的な原因を、教師のどのような力量を形成すべきかという「規範モデル」の欠如にあるとしている。

この村山の批判については、司会者の役割の重要性もさることながら、ある程度、検討の場における授業検討の方向性の共通理解が必要だと考える。しかしながら、村山の言う「規範モデル」を共有化することは実際には困難である。参加者の持っている目指すべき教師像はきわめて多様であり、しかもお互いにそれがわからない状態で参加している。授業検討の前に共通の前提をつくっておくことはほぼ不可能だと考える。とすれば、やはり授業者の「観」（授業観、子ども観、教材観等）を明らかにし、その世界を構築する方向での検討にしていくことしかできないのではないかと。私たちはその課題を授業者の「授業スタイル」と「観」の相即的発達（註2）と捉えている。

1.2 授業研究としてのライフヒストリー研究

教師のライフヒストリー研究は高井良健一（1995）が述べるように、1980年代の「新しい」教育社会学の誕生と密接に関連し、その課題意識は教師の個人史を教師文化や地域社会の文化史との関連で捉える方向へと発展してきた。こうした研究の豊かな蓄積に学びながらも、私たちの問題関心は、日本語教師個人の授業変革史、とりわけ教師のカリキュラム経験（自らの授業実践のリフレクションによる再構築）と授業スタイルの変革の関係性を明らかにすることにある。

ライフヒストリー的アプローチをとる理由は以下の通りである。授業は、本来、それを実践する特定の教師が実践経験の中で形成してきた見識に、深く根ざした営みである。つまり、授業の構想と実践に

において、目の前にいる学習者の状況をどう理解するか、授業の目的をどう想定するか、教材や学習活動をどう利用し組織するかということは、その教師のそれまでの授業実践経験の歴史に由来している面が大きい。言い換えれば、個々の授業には、教師がその都度、授業を自らの実践経験に由来するものとして構想し実践するだけの、個別具体的な必然性が見出せるはずである。しかし、従来の授業研究は、授業が目的とする能力形成や教科内容習得に、手段としてどのような教材や学習活動が有効か、という目的-手段関係を基本枠組みとした研究視点をとる傾向が強かった。そうした研究視点に基づいて、目的達成に対する手段の有効性を検証し、この目的-手段関係を「どの教室にも通用する一般的な技術的原理」（佐藤学 1996）として提起しようとする一般化志向が、従来の授業研究の基本線であった。

しかし、近年教育方法学においては、授業の「技術主義的な把握」に対する再検討の機運が高まり、教師論としての教師のライフヒストリー研究とミクロな授業研究との間にクロスオーバー的な研究領域、すなわち「授業スタイル構築」を教師のライフヒストリーの文脈の中で理解しようとする研究領域が成立してきている（森脇 2004）。授業研究の本来の目的は、教師の授業技量の向上であると同時に教師の授業スタイルの確立にある。後者の観点からすれば、たとえ一時間の授業であっても教師個人の過去と未来の文脈の中の現在の授業だととらえることができる。

1.3 ストップモーション方式とライフヒストリーインタビューの組み合わせ

これまで私たちは、日本語教師の成長過程を明らかにするために、日本・海外の日本語教育現場に赴き、授業参観及びライフヒストリーインタビューを行ってきた。日本語教師の成長過程を「授業スタイル」の形成とし、観との相即的な発達を一つのモデルとして形成しつつ、個別事例研究を重ねてきた（康他 2021 2018 森脇他 2017）。研究方法としては、授業参観を行い、事後検討において授業の特徴について浮き彫りにし、その特徴がどのように生まれてきたか（あるいは取り入れたか）を明らかにするという方法をとってきた。日本語教育の専門家（坂本、小西）を加えての参観によって、授業の多面的な分析が可能となり、インタビューにおいて、ライフヒストリー的な要素も加味することにより、その教師独自の世界を明らかにするとともに成長の過程を浮き彫りにすることができるようになった。

今回は、実際の参観ではなく、すでに撮影された授業のビデオ記録について、どこまでこれまでと同じような検討・考察ができるかを課題とする。授業の事実を共有した上での問題設定が可能というストップモーション方式の利点を生かし、授業の特徴の出自を明らかにするというインタビューを取り入れる。そのことによって、授業の良し悪しを論じる従来の検討を脱却することができる、と考えた。

2. 胡君平氏の授業の検討

2.1 胡氏のプロフィールと成都理工大学における日本語学科の状況、授業映像について

【胡氏の略歴】

1979 年生まれ。大阪府立大学で言語学修士、博士学位取得後、2017 年 9 月に成都理工大学日本語学科で現職に就いた。現在は教育を担当すると同時に、同学科の主任（管理職名、学科長に相当する）の任にあたる。キャリアから言えば、初任期（1～3 年）から中堅教師（5～10 年）に至る時期の教師である。戦後、中国における日本語教育を担った第一世代の日本語教師の弟子の世代である。日本や日本語（教育）の情報がインターネットを通して簡単に手に入る一方、学歴社会が進み、日本語教師も日本への留学、博士号取得が必須になっている世代である。胡氏は、若手ながらも主任を任されるほどの大学におけるリーダーであり、日本語教育においても下記のように日本語教育コンテストでトップをとるなど、きわめて優秀な教師と言ってよいだろう。

【日本語専攻の状況】

成都理工大学日本語専攻は1997年に設置され、現在、学生数は1年生から4年生まで計240名前後（一学年2クラスずつの8クラス）の学生数を持つ。教員の構成としては、中国人教師は17名、日本人教師は1名、である。中国では、単科大学として創立された大学は大学入学者増に対応するために名称はそのまま総合大学化しているケースが多い。日本語専攻はその過程の中で設置されることもよくある。ただし、専門学部と違い、社会状況（例えば就職状況）に組織は大きく影響される。

【授業映像について】

科目名：上級日本語

教科書：『日語総合教程』第5冊 上海外国語教育出版社

学習者：日本語専攻3年生（前期）

学習者は胡氏の担当クラスの学生であり、授業内容は普段行っているものである。ただし、コンクールの規定時間内に、授業形式、複数のタスクを示せるように、通常授業より進度が早めになっている。また、同様の理由で授業映像が編集されている。

2.2 授業検討の事前経緯

胡氏の授業は2020年12月に行われている。

2020年12月19日 授業の実施

中国日語教学研究会西南分会2020年年会（線上会議）（中国日本語教育研究会西南分会2020年大会）での受賞授業である。オンライン開催で、事前に録画した授業映像を上映して、専門家より評価されるという形で行われ、そこで、一等賞を受賞している。

この授業のビデオを日本に送ってもらい、それを各人（森脇・康・坂本・小西）が「事前検討」の前にビデオを視聴した。

2021年8月24日 事前検討（Zoom）

森脇・康・坂本・小西で当該ビデオをもとに事前検討を行った。事前検討では、送付してもらった授業映像の授業記録をもとに作成した検討シート（授業の展開の概要・・・康作成）を用いて検討を行った。事前検討では授業を見ながら、気になる箇所等を出し合って、前もって尋ねておく項目と当日のインタビュー項目を分類・整理した。

2.3 教科の目標と授業の概要

詳しくは、後掲の授業記録に譲るが、授業の展開は、次の通りである。

授業の冒頭に、事前に配布したワークシートの使い方を口頭説明した。授業後、本時間で取り上げた語彙、表現、童話のあらすじ、童話の続きをワークシートに書くことについてである。説明の後、PowerPointにて本時間の予定を示した。授業は以下01-04のように、4つのパートで構成されている。

授業の展開

- 01 当番発表、即席スピーチ
- 02 動画鑑賞、ブレスト（ブレインストーミング）
- 03 文章読解、資料紹介
- 04 同伴（ペアあるいはグループでの）復習、宿題

日本語学科「上級日本語」の教科目標

1. 了解日语思维模式…〔日〕日本語の考え方を知る。
2. 掌握不同领域日语文章的写作特点…〔日〕異なる分野の日本語の文章の書き方の特徴を身に付ける。
3. 熟练掌握不同领域日语文章的重点词汇和相关表述…〔日〕異なる分野の日本語の文章の重要語彙及び関連表現を身に付ける。
4. 应用日语知识表达基本思想和跨文化理解…〔日〕日本語の知識を生かして、基本的な考えを伝える、異文化理解する。
5. 分析日本社会、语言、文化等领域现象和背景…〔日〕日本社会、言語、文化等の現象と背景を分析する。

＊授業の展開

胡君平先生の授業概要（35分の授業映像）

授業日：2020.12.18-19

クラス：成都理工大学 日本語学科3年生（日本語専攻）

教材：『日語総合教程』第5冊 第5課「木の葉の魚」安房直子



＊中国日語教学研究会西南分会2020年年会の賽課（授業コンテスト、研究授業）で一等賞受賞。

＊言語文化学博士

	授業活動 part 01~04	活動概要	エピソード記録	コメントや質問
1本目	スマホで出席入力			
	今日の予定をパワポで示す	【授業の予定】 01 当番発表、即席スピーチ 02 動画鑑賞、プレスト 03 文章読解、資料紹介 04 同伴復習、宿題 【ワークシート】 語彙、表現、あらすじ、童話の続き		＊画像サイズが大きいため、授業映像を5回に分けて送付してもらった。記録整理の際便利のため、1本目～5本目とメモした。
	01 当番発表 1分	2017級2班 魏雨芯作品（クリスマスの紹介）	T：お疲れ様でした。（拍手） どうでしたか。 S：すばらしい。 T：すばらしいですね。	（森脇） 当番発表の、例えば、時間制限、話題等、決まりがあるか。
	01 即席スピーチ 発表者選び 1分	【発表者の当て方】 牛タン 牛タン 牛タンタンタン あわ あわ あわわ （順番にリズムに乗せて手を叩いてく。 間違えた人は発表者）	いつもやっている「牛タン」を、本日取り上げる課の作者の名字に替える。	学生を当てるとき、色々な当て方がある。 ・即席スピーチ者 あわあわあわわ ・聞く役、答える役 じゃんけん ・グループ発表 サイコロ ・席替え グループメンバー2人ずつ入れ替え （森脇、坂本） あわあわで即席スピーチをする順番を決めるのが面白い。サイコロで発表グループを決めたりもしているが、この当て方ではできる子が出てくるとは限らない。うまくできないというリスクがないか。 どういった目的でやっているのか？いつごろから？ どうしてとり入れようと思ったのか・きっかけは？
	即席発表 3分 （4名2ペア）	【じゃんけんで役を決める】 1ペア目 負けた人 聞く 勝った人 答える 内容：第5課の感想 2ペア目 勝った人 聞く 負けた人 答える 内容：冬休みの予定	教師が進行役。 答えを考える時間を与える。 1ペア目聞く（答えを考える時間） ⇒2ペア目聞く（答えるを考える時間） ⇒1ペア目答える（教師がコメント。拍手） ⇒2ペア目答える（教師がコメント。拍手） 教師が会話の内容についてコメント 家族の話。第5課の内容と関連付けて話してくれたことが良かった。家族の次に大事なものは何だと思うか？仕事？お金？健康	＊7分 謝さん（2ペア目答え役）、「 会社人 」（アイちゃんと同じようにならない） 口頭発表は 中断させない。間違いを指摘しない。 ＊2本目作品放映中 「年上」を「 ねん うえ」 ＊2本目「～使用するの過程～」 （森脇、小西、廣） 間違いを訂正しない意図は？ （訂正する時もあるが、どのように判断されるか） （坂本） 質問の内容は、何でもいいのか。一人は学習内容について、一人は個人的な質問だったので。ここで何でもよいにした理由は何か。どうしてか。一見プライベートな質問に見えたが、男の子の答えには、第5課の学習内容に繋げていた（あいちゃんは結婚して両親と離れなければならない）。何か学習内容に繋げなさいという指示はあるのか。

2本目	02 動画鑑賞	2018級1組5組 アフレコ作品 	「学習通」にグループごとに提出したビデオから、第5組の作品を鑑賞 構成： ①童話の粗筋、 --アニメ作品、役割分担吹替演劇 ②起承転結、 -- ③自然保護の理解 --	*「食べ物は何でもない」⇒「なんでもない」 「年上」⇒「ねんうえ」 放映中は 中断させない。間違いを指摘しない。 (森脇、小西、康) 放映後の教師のコメントは、作品の良さを評価する。途中での読み方のミスを訂正しない意図があるか。 (森脇) 動画作成の素材、コンテンツは決まっているのか。それとも自由発想なのか。 動画作成、発表、グループ等、 アウトプットを中心とした授業形態の発想のきっかけ、 インプット学習と比べて、メリットとデメリット
3本目	動画鑑賞の続き 教師からのコメント (パワボあり) 2分		*「学習通」でアップしてあるので、ここがよかった、ここが間違えている、など、コメント指摘投稿大歓迎。 *教師コメント。キャラクターの個性、分析	提出課題へのフィードバック 提出課題は 丁寧にフィードバックして共有する。
	02 プレスト 頭脳風暴 *グループ討論 +発表	「学習通」の討論コーナー 質問、回答 ① グループごと質問を教えてください。 劉さん：(質問を読む) あなたなら、この誘惑をどうやって我慢しますか。		T：誘惑に勝つ、誘惑に負ける、という言い方もある。 提出課題は 丁寧にフィードバックして共有する。 (パワボ有)
		【2分間、グループ討論】  【討論結果の発表グループはサイコロで決める】 1組発表	 発表後、拍手 教師がコメント	*4分37秒 1組のグループ発表、 「～～その鍋を使う、使用するの過程に～～」 *4分49秒 「つまり、物事の使用するの、過程に～～」 口頭発表は 中断させない。間違いを指摘しない。
		グループ討論の結果発表(プレスト)後、「学習通」への投稿回答を2つ取り挙げる。 回答者挙手確認。 教師がコメント	教師がコメント	提出課題は 丁寧にフィードバックして共有する。 (パワボ有)
		「学習通」の討論コーナー 質問、回答 ② 牛さん：(質問を読む) どうして着物を手に入れていたら、アイは態度を変えたのだろう。 *時間の関係でプレスト無し、「学習通」への投稿回答のみ。 回答者挙手確認。 教師がコメント。	「初心」を取り挙げる 	T：「アイは態度を変えた」より、「アイは態度が変わった」という表現に変えたほうがいいと思います。他動詞、自動詞の違い～～～ 提出課題は 丁寧にフィードバックして共有する。 (パワボ有) (坂本) 学生の発表について、さらに深めることはしないのか。教師のコメントで終わったのはなぜ？先生が大切にしていることは？ 語学教育では、インタラクションも大切にされているが、授業時には学生の発言や誤用に対する即時的な対応がありません。しかし、学習通を通じた学生の質問や意見を基にした教師からのフィードバックや学生との共有は多い。授業時の即時的対応と学習通を基にしたフィードバックなどのバランスやこだわりがあれば、お聞きしたい
4本目	プレスト 頭脳風暴 *グループ討論 ではなくて、 投稿回答に使われた言葉を取り挙げて、 表現、言葉を増やす。 2分30秒	「初心」を使った表現 砥砺前行 《咬文嚼字》版2017年度中国十大流行語 	中国語「砥砺前行」⇒英語⇒日本語 初心を忘れない、初心を忘れず、前へ進め 肝心な言葉は3回 復唱 突然、徐さんを当てる。 「立ってください、座ってください」 「惊不惊喜，意不意外」⇒驚きだね、 「扎心了，老铁」⇒グサッと来たよ、アニメキ 生々しい動詞より、擬音語で訳したところが面白い	(康) 提出課題へのフィードバックと共有、例えば、「学習通」に書かれた質問、答え、言葉、例えば、「初心」の関連表現⇒いくつかの流行語紹介、等、どのような意図で取捨選択されているか。 (森脇) 教科書から離れた内容、例えば、流行語を取り上げるための時間は、どのように配慮しているか。 インプットが重要だと考える人はこういう脱線のことを授業ではできにくいと思うが、胡先生はどういうふうにそれ(時間配分)を克服して、やっているのか、言葉の広げ方の発想を聞きたい。

ストップモーション&ライフヒストリーインタビューによる授業研究

03 文章読解 資料紹介 5分		<p>オンライン提出 予習の文章のシンキングツール 二人の作品紹介</p> 	<p>1つ目の作品 本人に、「すごいわいいですね、盧さん」 全員に、「場所移動した、なぜでしょう」 作品へのコメント。</p> <p>2つ目の作品 作者探し。 作品の一部内容を全員読み。 作品へのコメント</p>	
	気分転換 2分	<p>文章のあらすじが分かったところで、気分転換 手組み「狐の窓」</p> 	<p>前に来て、先生と一緒に手組見たい人を募集</p>	
5本目	<p>著者紹介 作品紹介 安房直子 4分</p>	<p>著者紹介、代表作紹介 作品① 2016級中国美術学院金賞卒業創作動画《狐狸の窓》 10秒動画 文章（「学習通」配信済） 赤下線を一斉読み 「主人公のぼくは、山で狼をしている青年である。ある日山で、白ぎつねの子どもの見かけて追いかけて・・・子どもの・・・青く染めた・・・指・・・の窓を・・・のぞいてみると、・・・こぎつねの母ぎつねが座っている。」</p>	<p>動画 ⇒ 文章 ⇒ 一斉読み ⇒ 「学習通」で確認するように</p>	
		<p>作品② 《北風のわすれたハンカチ》 成都理工大学 日本語学科2017級1班 李思媛作品 24秒動画 動画を見て、内容は自分で想像するように 作品のあらすじ</p>	<p>動画を見て想像する ⇒ 「わからない」 ⇒ あらすじの一斉読み ⇒ 続きはどうなるか、次回のお楽しみに</p>	
04	<p>同伴復習 宿題 3分</p>	<p>【ワークシート】 語彙、表現、あらすじ、童話の続き 2人～3人で同伴復習 【席替え（一人置きに立つ、グループ間の立った人同士が席を替える）】 時間となったので、授業後ペアで完成させるように。 授業終了。</p>	<p>机間巡視しながら、授業中練習した“不忘初心、砥砺前行、惊不惊喜 意不意外”などの表現を振り返る。「れんま」はどう書くか、携帯で調べたら、等、働きかける。</p>	<p>（坂本） 文学作品というのは先生にとっては扱いやすい内容か。どうしてか？ 文学作品を日本語教育の一環として扱う場合には何を学習者に身につけてもらいたいと思っているか。授業時には語彙や表現を扱う様子が窺い知れたが、先生が文学作品の授業で到達目標として掲げる点についてお聞きしたい。</p>

（＊授業記録は康鳳麗作成）

2.4 ストップモーション&ライフヒストリーインタビューの事例

当日(2021.9.12)の Zoom を使った授業検討は 2 時間以上にも及んだが、参加者の居住地が日本・中国において散在しているのにもかかわらずネット回線の維持も含めて無事に終えることができた。紙幅の関係で全てのインタビューを収録できないので、その中で 4 つの事例を紹介し、考察する。

01 当番発表、即席スピーチについてのストップモーション&ライフヒストリーインタビュー

当番発表では、事前に決めた一人の学生が教壇において、PowerPoint でのオリジナル作品を発表する。即席発表である。すなわち事前に発表者を決めず、「牛タン」ゲーム（ギュー、タンタンタンと前の人が言ったものに付加していき、誰かがつまずいたらそこで終了）で決める。「上級日本語」は毎日 2 コマあるが、その 1 つ目のコマで必ず行われる教室活動であり、3 分から 5 分間の発表である。テーマや話題は自由で、教師の事前チェックはない。また、当番発表は、必ず日本語の映像を提示することをルールとしているとのことだった。そこで次のような質問をした。

森脇：ここでちょっとライフヒストリー的なインタビューになるのですが、この当番発表というのは、胡先生がずっと昔から取り入れているのですか、それとも、最近になって取り入れているのでしょうか。

胡：当番発表は結構最初からです。

森脇：仕事始めてからずっとですか。

胡：そうですね。

森脇：それはどういうことで取り入れたのでしょうか。理由とかありますか？例えば人の意見を聞いてとか、あるいは、人の授業を見て、とか、そういう事がもしあれば紹介してください。

この質問に対して胡氏は次のように答えた。概略を述べる。

仕事を始めてからずっとやっている。中国国内では、インプット式ばかりの授業は、結構古いやり方とされていて、アウトプットを重視するような授業のやり方を進めている。それで、当番発表してもらって、表現力とか、思考力とか、あとは、大学生の注目、あるいは、関心を持つテーマとかを知りたい。また、教師ばかり立っていて教えるのが学生側、受け側としてもつまらないだろうという発想がある。なるべく学生に表現とか発表してもらいたい。

即席スピーチをやるきっかけは、2019年度、毎年ある、中華日本語スピーチコンテストがあって、一つの学校から、一人の学生を推薦して、全国大会でスピーチコンテストをやるが、審査の先生は、やっぱり学生さんは思考力が足りない、即席スピーチは下手、という鋭いコメントがあった。そこから、毎回やろうと、それがきっかけだった。

このインプット→アウトプットという中国の日本語教育の方法論の変化について追加の質問を行った。

森脇：胡先生は、自分が日本語を学ぶ時、つまり、大学生とか大学院生として中国本土で学んだ時にこういうことはやっていましたか？

胡：いいえ。ほとんどやってないです。発表は、大学に入って院生になると、ゼミの発表などでは発表するのですが、スピーチとか当番発表とかはしてなかったです。

森脇：そうすると、インプットからアウトプットへという流れってというのはどうやって胡先生は知ったのですか？

この質問について胡氏は次のように答えている。

このことについては深くは考えてないが、ただ日本で研究室のゼミ発表とかを通してやっぱり自分は成長したと思う。自分の小さい頃の経験から見ると、座ってばかりはちょっとつまらない。あと、もう一つある。娘が日本の小学校に行っていた。例えば、小学校の授業参観日に行くと、みんな、生徒たちが積極的に自ら意見を発表したり、それから、日本のテレビで、街でインタビューするとみんな自然に自分の考え方を言ったりすることができる、その辺についてはやっぱり中国の学生にもやってみてほしいと思う。

考察：この胡氏のインタビューから次のことがわかる。

- ①中国国内における日本語教育の流れがインプット重視型からアウトプット重視型に変わってきていること。そしてそのことを胡氏がきちんと認識していること。
- ②胡氏の当番発表の設定が直接的には、日本語スピーチコンテストでの「即席スピーチが下手」との指摘等がきっかけになっていること。しかしながら自分の被教育体験では経験したことのない活動だったので、日本留学時における日本人の「街頭インタビュー」等をヒントに考え出したこと。
- ③当番発表では学生の主体性を重視し、ルールは映像を使うということだけにし、事前の指導はしない。また細かな間違い等についての指導もしないようにしていること。

胡氏の問題意識の明確さ、また教材や活動収集のアンテナの高さを感じるインタビュー内容であった。

02 「牛タン」ゲームについて

康：ここでは「あわ、あわ」だったんですね。他に当てる時、学生を指名する時に、いろんなやり方をしているのですが、これがとても面白く楽しそうで、授業にもつながっているような感じだったのですけれど、なぜこんなことをされているのですか？

それに対して胡氏は次のように答えている。

ある教育研究会で、教育心理専門の先生の話だが、人間の集中力は20分ぐらいが最大制限という話を聞いた。やっぱり皆さんじっと座っているとなかなか集中できない、指名をいろんなやり方を通して集中力を高めて、緊張感を持たせるという意図でやっている。あとは、ゲームでみんな面白いだろうから、気分転換にもなるだろうし、もともと「牛タン牛タン」のゲームだったが、この「木の葉の魚」の作者は安房さんなので、作者の名前も覚えてもらおうと思って。違う授業では、例えば、「パンダパンダ」とか、パンダの言葉を覚えてもらうとか、いうふうに考えている。【上級日本語】最初から。（就職）1年目は【基礎日本語】で、2年目から【上級日本語】を教えて、今は3年目になる。最初は「牛タン牛タン」ばかりやっていたので、「あわあわ」にしようかなと思ってやった。

私の学生時代はこういうゲームとかほとんどやっていなかった。

日本にいた時は結構芸能のバラエティ番組が好きだった。たまたま牛タン牛タンを見かけて、これは使えるなって、あとは、早口言葉とか、そういうものを思い出して、取り入れて、日本の文化も知ってもらえるかなって。あみだくじも入れたりしている。班分けであみだくじもやっている。

ゲームでミスをした子が出てくるがあまり機転のきかない学生が出てくるリスクについてはどう考えているか、という質問について胡氏は次のように答えている。

できる子ばかり指名するのはちょっとあれかなと思うので、本当にうまくできない子にもチャンスを与えたい。実際に、この発表ではなくて、例えば、質問してもらう場合は、できない子は「質問ありません」、考え方も全然何もありませんという子もいる。その場合は私から質問を投げたりする。「どう思いますか」「正しいですか」って、「いいと思いますか」っていうふうに質問を投げたりする。でも、これは、即席スピーチなので、キーワードを挙げて、それについて好きなだけ、喋れるだけ喋ってもらえばいいという話なので、ほとんどできる、みんな。

当たって欲しくない、当たりたくないといった子がいる。確かに全然日本語ができなくてそういう子は1クラスでは2、3人とかはいる。だけど、やっぱり、積極的に、自分の意見とか自分の考え方とか言ってもらいたい。実は授業が終わって最後にアンケートもしている。この授業で一番好きな活動とか嫌いな活動とかというインタビュー紙で書いてもらった。「先生、ちょっとこういうゲームはちょっとビクビクします、苦手です」と書いたのは1人だけで、他の学生は「面白いんです」「全然つまらなくない、この授業」と評価してくれた。その子に対してはやっぱり就職してからも、自分だけはやりたくないという場合もあると思うが、やっぱり、何とか頑張ってその困難を乗り越える必要があるというふうに、個人的に説明している。

考察：胡氏のインタビューから次のことが分かる。

①いくつかの言語的なゲーム活動を発表者決定にも使っている。楽しい活動を取り入れることによって集中を切らさない、ということもあるが、即興的な対応性も重視している。

②この活動は、胡氏が授業を持つようになっての当初から用いている学習活動である。そのルーツはやはり日本留学時の経験（バラエティ番組）にあるとのこと。

こうした活動の持つリスク（誰が選ばれるかわからないので授業の見通しが持てない等）がありながらも入職以来胡氏はこの活動を行っている。その内容をできるだけ授業内容と関連させながら構成しよ

うとしながらも楽しさ、即興性を大事にしている。事例1とも関連するが、コミュニケーションにおける即興的対応(improvisation)を胡氏は大切にしている。

03 言葉の広がりをはかる、「脱線」について

動画鑑賞では、学習アプリ「学習通」にグループごとに提出されたビデオ作品から、第5組の作品を鑑賞、共有する。作品の良かったところ、表現の添削等丁寧にフィードバックしている。

ブレストでは、学生が「学習通」の討論コーナーに投稿した質問や回答を取り上げている。(コンクール授業の時間制限のため) 取り上げ方は2つのパターンを用いた。1つ目は、グループ討論をさせるパターンである。グループ討論の結果を発表するグループはサイコロで決める。2つ目は、質問や回答に使われた言葉に関連して、流行語の表現(不忘初心、砥砺前行、惊不惊喜意不意外、扎心了老铁)など、言葉の広がりを図った。流行語の表現、また授業からの「脱線」について胡氏は次のように述べる。

中国の文化や優秀な伝統的なものをアピールしようということで、例えば、最近の流行の言葉とかをみんなに紹介したい。自分がもし外国人に説明したいとき、表現できなかったらやっぱり困るというのが一つ、もう一つは、若い人に興味ありそうな、面白い言葉とか流行語とかを気分転換として一つでも多く言葉を覚えてほしいというのがある。それから、最近の出来事に関しても少し触れることができる。

(脱線について) まずは、脱線する意味だが、やはり今の学生さんの思考力、あとは、現在の国際の事情とか、国のこととか、最近のニュースとか、流行りの言葉とか知ってほしいというのがある。時間的な配分としては脱線の話なので、長い時間を取らないように気をつけている。テキスト中心でやっているの、脱線の話は1/5程度、前後、詳しいパーセンテージは出ないが、ある程度あったほうがもっともって学生にとってもいろんな発想、思考力が高まるだろうと、そういう意図がある。

森脇：自分の経験とか知識がないと難しいことですね。

森脇：脱線をするかしないかって、結構その先生の、教師の教育観みたいなのが反映しているような気もするし、それから、学生にとってみると、もしかすると教科書の中身よりも脱線した話のほうが覚えているということもあるのですね。これに対して胡氏は次のように述べた。

例えば、フィードバックのあるときは、やっぱり、ちょっと用意してあるもの、関連づけして説明に入れます。授業中で、例えば、学生さんがこういう言葉を出して、その場で脱線する、自分の知っていることを脱線して話す。自分で、回答とか解釈できない場合は皆に振る。「どう思いますか」って、「調べてみましょう」とか、携帯でその場で調べるとか。そうですね。その表情からも分かる。例えば、ある社会現象について、私は日本での留学体験とかバイトの体験とかいうと、みんなすごい興味津々で聞いてくれる。

考察：胡氏のインタビューから次のことがわかる。

- ① 現代社会の一端を表現する流行語については、母語である中国語についても積極的に取り入れている。
- ② 「脱線」については5分の1程度という、けっこう比重的には多くを取り入れている。日本での留学体験がリソースとなっている。

学生たちの言語感覚を磨くために、さまざまな工夫をしている。リアリティのある教材を「脱線」という形で取り入れている。

04 シンキングツール、「狐の窓」

オンライン提出された課題である文章の予習シンキングツール(文章を読み理解して、図で示す)作

品を2つ紹介する。1つ目の作品は、「場所を手掛かりに、場所移動の因果関係」を図で示した(図1)。2つ目の作品は「主人公の行動に注目して文章の枠組みをはっきりさせた」イメージ図だった(図2)。それぞれの良さをコメントした。

その後、「気分転換」と言って、手組み「狐の窓」を学生と一緒にして、著者安房直子の作品紹介という授業内容へと移る。先輩が作った安房直子作品のアニメを上映しながら作品紹介していく。

シンキングツールの機能、またルーツについて次のように胡氏は説明した。

*シンキングツール、図の構造について

魚の部分はタイトルで、下の四つの別れた枝は起承転結、括弧の数字は第1段落から第19段落は起、承は20段落(聞き取れない)その下の言葉なのだが、なるべくキーワードとか短いセンテンスで出して、パッと見て、流れがわかるような構図になっている。一番下はもうちょっと詳しく説明して、あるいは、まとめてください、あるいは、他に付け加えることもある。例えば、この文はすごい美しい、私はこういうふうに考えると、こういう風に感じたとか、みんなに任せている。

*シンキングツールのルーツについて

シンキングツールの図工式の日本語の本がある。そのPDFのものをみて、これは予習に使えると思って始めた。最初は授業を始める前にみんなに「予習しておいてくださいね」と言っても、確認したら全然予習できていない子もいるので、形としてこういうふうに必ず提出するようにすると、やっぱり予習しないとできなくなる。友達のものを写して同じようなものを提出すると両方とも0点だよと説明してある。

参考書自体は、シンキングツールの作り方とか、文書の作成とか、スピーチに活用できますっていうのがあって、このルーツ、他に参照した授業の形とか、そういうのは特になくて、毎年中国ではこういう授業のビデオのコンテストがあり、そこで私が考えついたのがシンキングツールを使って予習してもらったのいいと思ってビデオを作った。コンテスト用の、それを一応出してそのビデオを使って授業の最初に、みんな説明して、こういう風にシンキングを作ってくださいって、毎回の授業で予習として、提出してください、というふうに、私が考えたものだ。

*「狐の窓」(手を使った活動)について

気分転換と言うが、実は次の授業内容への繋ぎでもあった。安房さんの作品紹介の一環だった。

森脇：授業の構成の仕方は、活動をいくつか考えておいて、それを組み合わせて、授業を進めていくのか、それとも、筋があって、活動を入れ込んで行っているのか、私、見た感じでは、活動を先に考えて、組み合わせているようにも思えるのですが、その辺はどういう授業づくりをされているのかとちょっと聞きたいと思います。

この質問について胡氏は次のように答えた。

これはあくまでもコンテストの映像のために考えた、デザインした流れ。普段の授業ではこういった活動もいろいろやっているが、こんなにたくさん入れることはほとんどない。これは事前にいろいろな

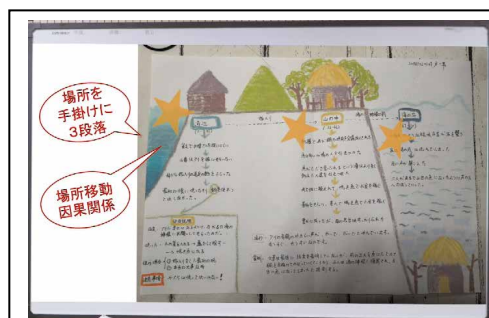


図1 シンキングツールその1

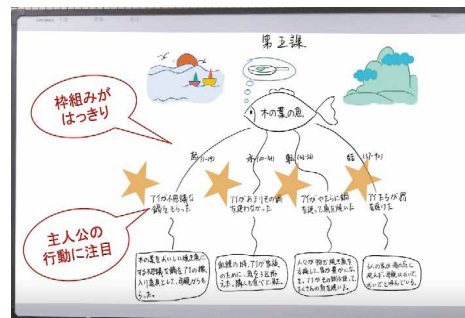


図2 シンキングツールその2

素材をまず持ってきて、この素材は隣のクラスの先生が持っているものだった。これは活動として使えるなと思って、まず素材を揃える。素材を揃えて、つなげてみると、何か入れたほうが気分転換として、つながりとして、よくなるから、一番最初から活動を考えているわけではなくて、まずは授業の内容、枠組みを考えて、「じゃあ、ここにちょっとこれを入れましょう、という感じです。（森脇：普段の授業はもっと流れを考えているという感じですね） 事前に、今日はこういう形で指名するとか、今日はちょっとこういう活動を入れるとか事前に考える。その場その場、学生が何か言って、じゃこれやってみましょう、というのたまにある。

3. ストップモーション&ライフヒストリーインタビューによる授業検討の意義と課題

3.1 何が明らかになったか

コンテストのために編集されたビデオであり、しかも、私たち（森脇、康、坂本、小西）にとっては初見の授業ビデオであった。また、2 時間あまりの Zoom による研究会であるなど、コロナ禍にあって様々な制限があり、また初体験の検討方法となったが、いくつかの胡氏の授業についての考え方（「観」）、授業方法のルーツについての知見を得ることができた。

1 つは日本語の授業において胡氏が大切にしている考え方である。これを「観」と呼んでおく。①学生の楽しいと思えるさまざまな活動を積極的に取り入れていること、②現代社会における生きた日本語、あるいは母語である中国語を積極的に取り入れること（教科書からの「脱線」を厭わない）、③即興的対応（即席対応の場面を授業に多く盛り込むこと、④コミュニケーション力の重視。表現（アウトプット）を多く取り上げていること、である。

とくに胡氏の授業での特徴は③にあると考えられる。コミュニケーションにおいては、他者の表現を理解すること、また自分の考えを的確に他者に伝えることがもっとも重要なポイントだと思われるが、胡氏はそれ以上に臨床的なコミュニケーション力を重視している。即席、即興、即興的対応(improvisation)と呼ばれる種類のコミュニケーション力である。おそらく実際のコミュニケーション場面で求められる力、また中国の学生にもっとも欠けている力、という認識がその考えを支えている。

2 つ目は、上記の「観」を的確に教材や活動に具体化している点である。ビデオは実際に授業で行われる活動を編集（凝縮される）したものであったが、それでも胡氏の「観」が明確に示された活動で構成されていた。しかも注目すべき点は、この教材や活動が誰かの先行実践研究（記録やモデルとなる教師）から得られたものではなく、その多くをまったく違う分野（例：日本のバラエティ番組や街頭インタビュー）から得ていることである。情報収集のアンテナの高さと日本語教育の教材とするための選択力と加工力がなければできないことである。多くの教材・活動を胡氏は日本留学における自分の体験を通じて入手し創出している。

3.2 総合的な考察

総合的な考察においては、この一連の授業検討の方法論的な意義と課題について明らかにする。その際、インタビューイーの胡氏、インタビューアー（康、坂本、小西）のコメントをまず記しておきたい。

①コロナ禍の影響で予定されていた授業現場の参観とインタビューが実施できず、2021 年 9 月 12 日に授業コンテストの VCR を流し、ストップモーション方式でインタビューを受けることになりました。

今回の授業検討及びライフヒストリーインタビューについて感じたことは主に三つ挙げられます。

まずは、研究の進展について、研究計画から、事前連絡、計画調整、インタビューの細かいスケジュールまで、ちゃんと考え、管理しているから、研究が順調に進捗できていると思います。

そして、授業検討とインタビューについて、質問をする先生たちの注目点は授業内容、授業のやり方、教員の経験や考えなど様々で、質問されて初めて気づくこともあり、今後の授業で反省する必要があると考えました。ちなみに、授業検討に用いる VCR は実際の授業現場を映したものではなく、コンテスト用のものとしてデザインした部分もあるため、学生の間違いを指摘するのを省いたり、練習や討論する時間を短縮したり、微調整をするところはいくつもありました。

最後に、チームワークについて、研究チームの先生たちは、密に連絡を取り、みんな真剣に課題に取り組んでいる姿勢に感銘を受けました。一つの研究課題にみんなの力、みんなの知恵を合わせることによって、より大きな成果につながるに違いありません。(胡 君平)

②今回は従来のストップモーション方式による授業検討にライフヒストリーインタビューを加えた。新しい試みであった。

ストップモーション方式による授業検討の良さとしてまず挙げたいのは、授業者と一緒に授業の客観事実を確認しながら話を進めることができる点である。次に、コロナ禍でなかなか現場に行けない現在、このような形で授業検討が実現できたことも良かった点である。

一方で、授業内容について気になるところと、ライフヒストリーインタビューのポイントを同時につかまなければならないことに難しさを感じた。事前に授業映像を送っていただけたことで、授業者を交えて検討する前に、事前検討ができたことが大変助かった。

また、ほぼ初対面の授業者への、画面越しのインタビューを行う際、インタビューイーにとってプレッシャーになっていないかという不安がある。インタビューアーの力（聞き方、フォローの仕方、話題の取捨選択及び話の流れから瞬時にキーワードをキャッチする力等）がこれまで以上に求められ、非常に重要なことだと感じた。(康 鳳麗)

③今回初めてストップモーション方式によるライフヒストリーインタビューをしましたが、メリットを多く感じました。以下2点述べます。一つ目は、映像を見ながらなので、インタビューアーもインタビューイーも授業活動や出来事について、誤解なく共通理解のもとに、質問や回答が可能であった点です。教師の発話や学習者の発言を正確に拾いながら教師の意図やビリーフなどを聞くことができました。二つ目は、映像をインタビューアー側があらかじめ見ておけるという点です。授業見学後のインタビューは、記憶は新しいものの、何に絞って質問したらいいか取捨選択する時間があまり取れませんが、今回のように事前に映像を見る時間がある場合には、じっくりと聞きたい内容を吟味することができました。

課題は、今回に関しては思い当たらなかったですが、授業中の失敗や、意図しないマイナス的な事象も記録映像を用いるために、つまびらかになってしまう点が挙げられます。うまくいかなかった点に触れられたくない心理が働くこともあるので、本研究が授業評価でない点を、前もって理解いただくことが必要だろうと思われます。

最後に、感想を述べます。今回の胡先生の授業映像はコンテスト用であり、編集がなされたものでした。しかし、本授業と通常の授業との異なりや共通点、また、コンテスト用ゆえのいくつかの不自然さまで本音を語ってくださっており、胡先生のお考えやお人柄が現れたインタビューだったように感じました。(坂本 勝信)

④<ストップモーションのプラス面>

・記憶に頼らず、目の前で行われている活動についてすぐに質問できるので、教師にとっても何を聞かれているのか理解しやすいと思われる

・授業の流れに沿って質問ができる（時系列で質問ができる）ので、授業の流れ（順序）についても自然に質問できる

・各アクティビティーについて、忘れずに質問できる（授業後の場合は、メモをし忘れたり、読み飛ばしたりして、質問し忘れる可能性あり）

＜ストップモーションのマイナス面かもしれないこと＞

・教師にとって、自分の授業を他者と共に見直すのは精神的に負担とならないか？

・インタビューを受ける教師への時間的な負担の問題もあり（授業後の質疑応答だけではなく、授業時間＋インタビューの時間がかかる）

・文字起こしをした場合、通常のインタビューのものよりも、ビデオがないため、何について質問しているのか、わかりにくいことがある。また音声の問題（Zoom の録画の音声）で、聞き取りにくく、文字起こしが難しい箇所が多くなる可能性も？

＜今後の課題？＞

・教師側の意見を聞いてみるとよいかもしれない。

⇒自分の授業と一緒に見るのに抵抗はあるか？

⇒授業中に自分では意識せずにやっていることに気づけるというよい面もあるかも？（小西 千代）

授業者、インタビューイーの胡氏の、授業検討において多様な意見が出され、それが気づきにつながったというコメントは、まさにそれがこの検討の意義を端的に述べていただいている。胡氏の開かれた姿勢と授業力向上についての飽くなき探究心がなければこの企画は成立しなかった。あらためて御礼を申し上げる。授業検討において、ビデオを流すことによって、授業事実を共有し、そこでビデオをとめての質問や議論ができたことは、ただ単にあれこれと感想を述べあう授業検討とはまったく違うレベルの検討ができたと考えられる。

一方、ビデオを流し事実を共有することは、授業者にとってプレッシャーとなる可能性がある。今回はコンテスト用の編集されたビデオを対象にした関係で、日常的な授業が撮影されたビデオよりはある意味、外向け対策済であったことがプレッシャーを低下させることになったとも言えるが、逆に日常性を失っているとも言える。ただし、このことは映像自体の価値を必ずしも低減させるとは考えられない。むしろ先に示した検討の結果のように、胡氏の「観」とさまざまな活動の関係、またルーツを明らかにするためにはかえってよかったとも捉えることができる。ビデオ検討の観点を共有することによって、この課題はある程度克服できる。

これまで、私たちは実際に日本語教育の現場に参入し、参与観察的に場とかかわってきた。また実践者とのインフォーマルな関係づくりにも力を入れてきた。信頼関係の構築によって、授業者の「本音」や状況認識を知るてがかりも多く得ることができた。そのことは現場において行われる日本語実践を理解する上で必須と考えてのことである。今回の試みは、コロナ禍の下とはいえ、きわめて例外的な条件のもとに行わざるを得なかった。しかし、この条件下でも、本稿では検討の成果、新しく得られた知見を示すことができた。指摘しておきたいことは、この研究成果を挙げられたのは共著者の康と胡氏のインフォーマルな信頼関係の構築が一つの鍵だったことである。

コロナ禍がいったん落ち着き、現場への参入が許された際にも、この取組はおそらく一つの授業検討として意義は残ると考えられる。しかし、やはり授業者と学習者の対話の質や現場の空気感、授業者の実践知を理解する上で必要な理解であり、参与観察者としての現場参入の一次的な経験でしかそのことを肌身で感じることはできない。その経験の上にこの授業検討の方法が何らかの形で位置付けられるのがのぞましい。

註

註 1

ストップモーション方式による授業検討には、大きく分けると、次の二つがある。①ビデオのストップモーション機能を使った授業検討（授業参観後、ビデオの再生をしながら授業検討を行う）、②ストップモーション方式による授業記録の記述方法

本稿では、前者の意味としてストップモーション方式による授業検討を用いる。

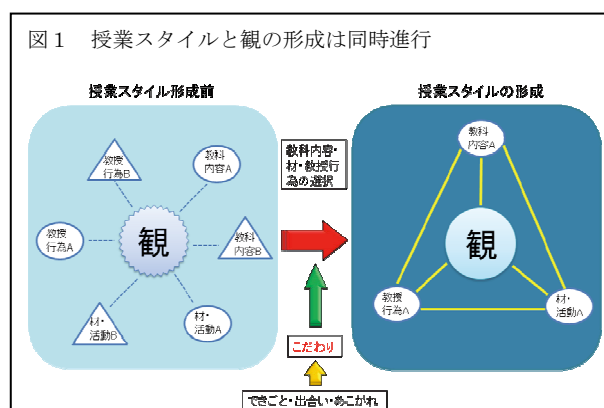
註 2

授業スタイルと「観」の相即的発達についてのモデルを私たちは次のように考えてきた。

観の形成、授業スタイルの変革の過程は、できごととの出会い、あこがれ、そしてこだわりによって促進されること、そして観と授業スタイルの形成が同時に進行することである(図1)。

授業スタイルがはっきりと形成されていない時期とは「観」も明確になっていない時期である。「観」は教師として、実践的な経験の中で「できごと」と出会い、「あこがれ」を持ち、「こだわり」を持つことで形成される。「観」は技術・方法を選び構造化していく。この逆の場合もある。

つまりある方法・技術にこだわることで「観」が形成されるという場合である。いずれにせよ、授業スタイルと「観」の形成は同時進行の関係にある。



参考文献

- 藤岡信勝(1991),ストップモーション方式による授業研究の方法,学事出版
- 二杉・藤川・上條(2002),授業分析の基礎技術,学事出版
- 康鳳麗, 森脇健夫, 坂本勝信, 小西知代, 田泉(2021), 初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成—2名の中国人日本語教師の14年間の足跡を追って, 鈴鹿医療科学大学紀要第27号, 23-31
- 康鳳麗・森脇健夫・大西宏明・坂本勝信・小西知代・水野直美・工藤節子(2018), 熟練教師の目標概念の多層化—二つの事例研究を通して—, 鈴鹿医療科学大学紀要, 第25号, 83-95,
- 村山功(2008),授業リフレクションによる授業研究—事後検討会で効果的に論点を出す方法—,静岡大学教育学部付属教育実践総合センター紀要 No.16,pp.37-44
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信(2017), 教師の「熟練性」の研究—2人の中堅中国人日本語教師の授業の比較分析を通して—, 三重大学教育学部研究紀要, 査読無, 第68巻, 355-367, 2017
- 森脇健夫(2004), 授業をつくる教師の知をめぐって.確かな学力と指導法の探求,日本教育方法学会編,図書文化,pp.121-131
- 佐藤学(1996),教育方法学,岩波書店
- 高井良健一(1995),欧米における教師のライフストーリー研究の諸系譜と動向,日本教師教育学会年報第4号,pp.92-109